葬儀屋ジョーカー

春後秋前

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
葬儀屋ジョーカー

【Ｎコード】
Ｎ１９０７Ｐ

【作者名】
春後秋前

【あらすじ】
主人公、紫苑は墓守。
祖父である治助に墓守としての仕事を受け継ぎ、日々墓掃除や墓掃除、また墓掃除（仕方が無い。紫苑がいるのは身内のいない、または素性不明の死人がいる集団墓地なのだから）またまた墓掃除、墓掃除、墓掃除、時々泥棒から護り、そして――死人との、会話。
死者の浮遊魂と会話の出来る紫苑と、治助。治助はもう引退してしまったが、紫苑はまだまだ現役である。
ある日、一つの魂が天国へ行きたいと申し出、その為に葬儀屋を

呼ぶことになった。リスクを伴うそれに、紫苑や葬儀屋は……。（一話）

ジョーカーとの出会い（前書き）

ジョーカーとの出会い

『紫苑(しおん)！』

本当は聞こえないし見えないけど、紫苑は聞こえるし、見える。墓守の紫苑は、産まれた頃からここにいて、これの声を聞いていた。これの姿を見ていた。だから、これを別段不思議とも思わないし、別段特殊だとも思わない。人間が息をするように、紫苑にはそれが常識だった。

『紫苑ったらぁ』

「はいはい」

紫苑はくるりと振り返る。そこには綺麗な墓達と……墓の数よりは少ない、魂達が浮いていた。

昔に死んだ者達。遺族ももう全て天に行ってしまった者達。

そんな者達の残留意思とか何ちゃらとかの塊。紫苑にとっては人間と変わりは無く、身体が無いだけのようなものだ。

『今日はあたしの墓を綺麗に綺麗に掃除してよね』

『いや、俺！』

『わしは最後でいいぞー』

『あら、最後は私です』

わぎゃあ、わぎゃあ。

月の光に照らされて、まるで火の玉みたいな魂達が騒ぐ。

こんな騒いで、誰にも聞こえないなんて。

『紫苑、知ってる？』

「知らない」

『……葬儀屋って知ってる？』

「葬儀屋？」

あ、ここ汚れ溜まってる。

墓を吹きながら適当に聞くと、少し桃色の魂は上下に揺れた。名前は百合奈。ずっと前、紫苑が墓守になる前から死んでいた、十歳

の娘だ。死んだらもう年は取らないが、生きていたら二十歳か三十歳辺りだろう。
『運び屋、とか。送致屋、とも爺様が言ってたなぁ』
「爺様？　治助さんの事？」
治助（じすけ）さん。先代の墓守だ。紫苑の祖父でもある。
そもそも、紫苑が墓守になったのは治助さんが墓守を、楽しくて立派な誇らしい仕事だと言い切ったからだ。まぁ、こんなドンチャン騒ぎなら楽しいだろう。治助さんも、こういう魂達を見たり、話せたり出来た。今は家で毎日ごろごろしている。死んだらここに来るとかどうのこうの言っていたっけ。
紫苑達が魂を見れたり話したりできるといは、今のところ二人だけの秘密だ。世界にはまだまだこういう人達はいるらしいが。
「っていうか、送致（そうち）ってどういう意味？」
『送り届けること。この場合、彷徨える紫苑達みたいな魂を天国に送ること。送致屋ってのはそういう人の事』
「……はい、墓拭き終了。ってそれ、葬儀屋の事？　治助さんが言ってた。葬儀とか送致とかする時、悪い魂が天国に行く魂を食おうとするって。それから魂を護って、天国に送るんでしょ」
『ありがとう。だから言ったじゃんー聞いてなかったなぁ？』
百合奈はふらふら浮いて、嬉しそうだった。
紫苑はぴったりと百合奈を見据えて言う。
「天国に行く魂を、何で食うの？」
『天国に行きたいから。悪い魂は数十年数百年間も地上にとどまり続けるか、地獄で罪を拭わないといけないんだ。でも、天国に行く魂を食えば……天国に行ってパラダイスができるのっ！』
「へぇ」
『んでね、天国に行ける魂を食えるのは、その魂が天国に行く瞬間のみ。その瞬間のみ、その場の魂は全員人間の形を取るんだ。んで、その人間の身体で天国の行く魂に噛み付けばＯＫ。噛み付くだけだよ、やばいよね？　危険危険』

「ふーーん」
紫苑は適当にあしらった。
何故、そんな話をするんだろうか。適当に視線を泳がせると、蒼い魂とぶつかった。これは五年前死んだ男の魂。名前を言ってくれないので、蒼さんって呼んでる。墓にも名前は記されていない。
『紫苑』
「あ、何です？　次は蒼さんの墓でも拭きます？」
『……その葬儀屋、明後日来るぜ』
「は？　え？　え？　……あ、蒼さん！？」
『しっ。お前、俺たちのことは見えないんだから。変人だと思われるぜ、お前の母親とかに』
「……葬儀屋が明後日来るって何で……？」
『田中がな。天国に行きたいんだとよ』
『ええ、田中恵美さん？　良い人だったのにぃ』
百合奈が呟く。
「それって、ここが嫌って事ですか？」
『いいや。天国に行って、家族に会いたいんだと。どうせ正月に一度は帰ってこられるんだ。さびしかねぇよ。いつか天国行くとき、また会えるし』
「……そうですね」
にこりと笑った。
そうか、あの田中さんが。かなりの美声で、優しく綺麗なおばさん的存在だったのに。葬儀って凄い危険ならしいが、大丈夫だろうか。まぁ、この墓場にそうそう悪い人はいないか。蒼さんもぶっきらぼうで何だか危なさそうな雰囲気もするはするけど（煙草とか吸ってそう）、優しいから大丈夫だろう。
『ここじゃ、大丈夫だね！』
百合奈が笑う。
しかし。
『いやいや、近くの墓所からやってくる可能性もあるぜ。ってわけ

で、ベテランを呼ぶ事にした』
「近くの墓所からやってくる？　ベテラン？　葬儀屋って何人もいるの？」
『まぁな。近くの墓所から魂がふらふら～ってくるんだ。ほら、墓場近くで見られるという幽霊の類はそれだよ。後、葬儀屋は大量にいるぜ。うじゃうじゃうじゃってな』
「へぇ……って事は、ここも危ないんだ。ベテランって誰？」
『今だ一人しか食わせていない、四年間やってきた男だ。先代と一緒にやったのを合わせると、十年くらいだろう』
『――一人？』
近くをふらふらしていた黄色い魂……田中さんだ。
不安そうに斜めに揺れだす。
『一人、食わせちゃったの？』
『ああ、お――いや、先代との最後の葬儀だった。先代は馬鹿だったんだってよ』
「お？」
今、何かを言いかけていた。
蒼さんはぐっと後ろに揺れたが、揺れるのをやめた。
「親父だよ。そいつの、親父」
どこからか、生身の声がした。
バッ、と紫苑が振返ると……治助さんがいる。白髪も薄くなってきて、でも元気そうな六十代。あ、七十代だったけ。
おお、と魂達はどよめいた。
『久しぶりじゃねぇか、治助』『爺様ー爺様だっ』
『やだ、加齢臭くさいー』『魂に鼻はねぇだろ』
『紫苑ちゃんだけで良いじゃん』『何で来たし』
『お久ー』『おうおう、紫苑に麻雀を教えてやってくれや』

簡単に説明すると、慕われているのである。紫苑が皆の妹や娘的存在（少数派で姉）であるように、治助さんは皆の祖父や親父、兄

貴や近所のおっさん的存在なのだ。
「久しぶりだな……まぁまぁ、元気そうじゃ」
「とっても元気。で、治助さん。親父って……どういう事？」
「そのベテラン君の親父が先代だったんだが、死んだんだよ。けろりと。しかも、息子の前でな」
「……葬儀中に？」
「ああ。食われちまってな。首を」
騒いでいた魂がしん、とした。
「葬儀中に来た悪魔ども……悪い魂をこう呼ぶんじゃ。悪魔どもに首を食われて、その時死んだ。天国へ行くはずの魂まで食われちまった。親父は死に、魂の方は食われ死に。周りの魂も荒らされて食われたらしいわい」
「え。人間も食われるの？」
「一応、美味いらしい。だが、首だったから死んだまで。普通の人間に噛まれたのと同じようなもんだ」

食われて、死んだ。
自分の父親が死んでしまったのに、葬儀を続ける息子。
どんなに屈強で、どんなに強い人なんだろう。
どんなに、寂しかったんだろう？
どんなに、経験をつんだ人なんだろう。
二十歳？　三十歳？　坊主頭っぽいイメージ。
大人びていて、さらりとしている人なんだろう。優しくて、人を理解できて。でも悪魔は許せなくって。
勝手なイメージだけど、きっとこんな感じだろう。

「皆気をつけろよ、悪魔にゃあな。そうそう。葬儀屋は、ナイフで悪魔共を斬り捨てるんだってよ、眼にしっかと収めとけよ！」
『怖いよねー。悪魔も葬儀屋も。巻き込まれたら最悪だよ。でもで

も、皆の人間姿が見れるなら、楽しみかなぁ』
百合奈がどこかうっとりするように言った。
蒼さんも、上下に揺れる。しかし、田中さんだけ恥ずかしそうに左右に揺れた。
『やだなぁ。私、かわいくないし……』
「ほっほっほ」
治助さんは笑った。
「可愛くないかもしれんが、綺麗なのは確実じゃ」
『きゃーっ、爺様が攻めてるよ！　ナンパ！　ナンパ！』棒読み。
『逃げてー、田中さん超逃げてー！』ハイテンション。
『駄目です治助さん、紫苑にはもう結婚した相手がいるのです～』真似。
決して田中さんでは無い。順番に、七瀬（ななせ）・芽衣子（めいこ）・夏海（なつみ）の三人組。多分、紫苑と同い年くらいだろう。いつ死んだのかは知らないが、いつも三人でつるんでいる。
『いいえ、いいえ。もう貴女は自由です。駆け落ちしましょう！』
ハイテンション。芽衣子だ。
『まぁ、何と大胆なー』棒読み。七瀬。
「もうやめんか。全然似てないし」
治助さんが止めても、三人娘はきゃあきゃあ騒ぎ続けた。

そして、葬儀屋がくる日の夜。
「治助さん、紫苑。今晩もいつも通りに仕事してればいい？」
「ああ、すぐ向かうから。いつも通りにしとけ。案外もう来てるかも、じゃな」
「そうなの」
そう言って、コートを羽織った。白Tに迷彩のパンツ。墓守に似合わない格好の上、茶色のコート。魂達が許してくれなきゃ、こんな格好はしない。母親や父親はいつも、罰当たりな奴めという眼を

してくる。もう両方慣れたけど。
たたたたた、とスニーカーの音を鳴らして塀に近付いた。家と墓所との間の、少しだけ高い塀を乗り越えればすぐ。
ぐっ、と頭上の塀に力を入れて、よじ登った。誰かに見られたら、盗みを働いているみたいに見えるだろう。
暗くてよく見えないが、向こう側に降りる。大丈夫、この下はただの――
「ぐえっ！」
――芝生、じゃない？　足もとに人間の感触！
「きゃあっ」
誰か踏んでしまったようだ。あの、葬儀屋か。ナイフを持つという、葬儀屋か！？
「あの、そのっ……ごめんなさいっ！」
「痛……っ」
「ああの、大丈夫ですか？」
眼を凝らしてみていると、随分見えるようになってきた。この頃、夜目が利きやすくなってきている。職業柄か。昼や朝にも仕事はするが、夜の方が魂と話しやすいから、夜を好んでいた。そのせいだろう。
――足もとで、黒いコートを着た“少年”が倒れていた。
「葬儀屋さんじゃない……の？」
「……っ、あ……済みません。ちょっと頭を打って……て、あれ？」
黒髪で、蒼に近い黒の瞳。その瞳が、紫苑を見つめている。
紫苑も、彼を見つめていた。
そして、同時に。
「誰？」
沈黙。

紫苑が黙っていると、その少年は言った。
「俺は“葬儀屋”。あんた、墓所に何の用？　今日は危ないよ、帰りな。俺は墓守を探してるんだ」
「私が“墓守”よ、あんたが葬儀屋なんて嘘でしょ？　あんたこそ帰れば？」

沈黙。それから、相手の言葉を反復。
そして、あわあわと指を差し合って眼を丸くし合った。
こいつが、葬儀屋。紫苑より少しだけ身長も低い、少年が。
「え、おまえ何歳？」
「十六」
「ぎゃ、同い年！」
「ええええええっ」
屈強で優しそうで、坊主頭で笑顔の似合うイメージがばりんばりんと粉々に砕け散った。
こいつが、葬儀屋。
ベテランで、親を亡くした葬儀屋。

『本当に葬儀屋さんだね！　その腰のナイフ、爺様が言ってたのと似てるし。そうでしょ？』
百合奈がいつの間にかいて、尋ねていた。
葬儀屋の少年も、ぴったりと百合奈に視線を合わせて言う。
「ああ、そうだ。っと、何でもねぇよ」
慌てて紫苑に視線を向けて、誤魔化す少年。訳が分からない。
でも、百合奈と話せている以上、信じるしかなさそうだ。
くるりと、踵を向ける。
「おいで、私は紫苑。ここの墓守よ、今回葬儀をする田中さんの墓につれてってあげるわ」
「おお、さんきゅー。仕事名でいいよな、ジョーカーっていうんだ。よろしく！」

「じょーかぁ？　あんた、葬儀屋とかどうのこうのの癖して、二次……西洋風な名前ねぇ」
二次現って言いかけた。これもあの三人組のせいだ。
「……いや、葬儀屋同盟っていうやつがあるんだけどさ。それに葬儀スタイルとか提出したらな、名前が帰って来るんだよ。“これで貴方も正式な葬儀屋です”っていう証な。ついでに、ジョーカーの意味そのまんま」
「は？」
「だーかーら。ジョーカーっていうのは、辞書引いたら二つでてくる。
しゃれや冗談をいつも言う人、道化者。それと……ええと、トランプでピエロの絵とかが描いてる番外の札。手元にない札の代用として使う、ばば。――後者の方の意味だが、一個格好いいのがあってさぁ」
「何？」
「最高の切り札！」
にこっ、とジョーカーは笑う。さわやかで、可愛らしかった。
「格好良いだろ、切り札ジョーカー！　何かあったら助けに参ります、姫君」
「馬鹿か」
それも一瞬。まさしくジョーカー。まさしく道化者。すぐ笑いを取ろうとふざけるようだ。
これが同い年とは。もっと年下に見える。赤ちゃんくらい。……それは無いか。
でも、同い年でよかったかもしれない。
説明しやすいし、緊張もしない。慣れてる感じがするのも理解できたし、本物らしい。
『あ、あわわっ。葬儀屋さん……っ？』
行くと、田中さんがなぜか大慌てしている。

紫苑は、まず説明した。
「この墓が田中さんの墓、それで――」
「おう」
「――あの黄色の魂が、田中さん」
「ん、ありが……え？　今、何つった？　姫君」
「あの黄色の魂が、田中さん。姫君やめい」
「じゃ、紫苑。……って、見えるのか！？　き、聞こえるのか！？　じゃ、お前本当に墓守！？　しかも、上等な墓守じゃねぇか。色まで判別できるなんてよ……」
「何、驚いてるの？」
その驚き様が新鮮で、馬鹿にしながらも嬉しかった。彼は、心の底から関心してくれている。
しかも、次の言葉でもっと有頂天になった。

「色なんて、なかなか判別できないんだぜ。お前、素質あるよ。ひめぎ……ならぬ紫苑」
「……ほんと？　ありがとう」
こんなに手放しで褒められたのは久しぶりで、顔が勝手にほころぶ。彼も、男の子らしい笑みを見せた。白い歯が光る。
百合奈が、ほぉーっとかひゅーっとか騒いでるけど、無視だ。
魂達がぞろぞろと集まってきたのを確認して、ジョーカーは言った。
「そろそろ、始めるぜ！　早いけど、その方がいいだろ」
「うん」
「下がって」
「……うん」
魂達と一緒に、田中さんの墓周りを、少し離れて囲む。
ジョーカーが墓の前に立ち、田中さんが墓の上に浮かぶ。
そして、ジョーカーは蒼銀のナイフを取り出した。怖いのか、田中さんが揺れる。揺れる。

それから、彼は言った。
「今宵の晩餐を共に」
そして、ナイフを墓に突き刺す。……突き刺した！？
驚愕してしまって、声も出ない。
その瞬間、しゅるりと周りに光が満ちた。落ち着いた光だ。慌てて眼を閉じて、我慢する。今の闇に慣れた目には少々きつかった。
――その後も少し目を瞑っていると、唐突に頭に手が置かれた。
「え？」
目を恐る恐る開けて横を見ると、見たことも無い男女の群れ。しかも全員が薄い。
一瞬戸惑う。が、すぐに納得した。そうか、元の姿に戻るのだ。墓を見ると、田中さんも戻っている。しかも、別段綺麗である。ジョーカーも、おお、と驚いていた。そんな田中さんの周りを、黄色い光が薄く包んでいる。田中さん自身も、徐々に薄くなっていた。
その時、ぐっ、とコートの裾が引っ張られたんで振返ると、十歳くらいの女の子が立っている。
――百合奈か。
「かわいいじゃないの」
「ありがと。田中さん、すっごく綺麗だね」
にこっ、と微笑む百合奈は、田中さんに負けず劣らず可愛らしい。これで、身内も引き取り先も無しに死んだというのだ。かわいそうな気分になる。
と、急にどよりとした暗い感情が心を掠めた。
「来たぜ！　気をつけろっ」
「っ」
百合奈が、ぐっと竦んだ。怖いのだろう。
その時、視界の端を薄黒い人間が通り抜けていった。
これが悪魔か。

「ジョーカーっ、そこに！」
「おお、地獄に堕としてやる」
誰かが叫ぶ。しかし、言い終わる前にジョーカーはもう一本ナイフを取って斬り捨てていた。斬られた人間は、魂の姿になって、そして粉々になって消える。“地獄に堕ちた”らしい。
次々次々、予想以上に悪魔は現われた。ジョーカーも応戦しているのだが、間に合わない。
「……」

気がつくと、背中の田中さん以外、ジョーカーの全方向に悪魔が囲んでいた。
「ちょっと、圧倒的過ぎるんじゃないの！」
紫苑は叫ぶが、ジョーカーには聞こえない。
「この……っ」
近くの男が、悪魔に触ろうとしたが、その前にジョーカーが一喝した。
「黙ってみてろ！」
悪魔も含めて、魂達がびくんっ！　と身体を竦ませた。その瞬間、向かい側の奥に蒼さんが見える。彼だけは竦みもしていないし、ただジョーカーを見つめていた。
ジョーカーはそんな視線に気付かず、もう一本ナイフを取り出す。田中さんは怖くなったようで、つい一歩下がった。
悪魔が、じりじりと間合いを詰める。
その瞬間、ジョーカーはまた叫んだ。
「まとめて送ってやるよ……！！」
――低い、飛躍。八対中の三対に一気に近付くと、回転。二回ずつ切り裂かれた悪魔は、すぐに粉々になる。しかし、それが風と化す前にジョーカーは動いていた。近くの二体の首を走りざまに切り裂くと、田中さんに接近していた残り三対にナイフを投げる。二体

に命中し、一体がもうすぐ噛み付こうとした瞬間。ジョーカーはそれより速く近付いて落ちたナイフを前転で取り、そのまま足で後一体の首を絞めた。そして、そのまま肩車のようにのっかると、首を両側から切り落とした。しかし、それが見える前に粉々になって風と化す。

ひゅんひゅん、とナイフを回しながらホルダーに収め、止まる。

「……地獄送り、完了っと」

「凄い……」

間近で見ていた田中さんは目を白黒させているし、声さえ出せないようだ。

蒼さんはどうだろう、と好奇心で見ようとして……紫苑は視界に悪魔を見つけた。息が止まるかと思った。

まだ一体。魂にまぎれて様子を見ていたのだ。しかも近くには三人組もいる！

「……っ！」

叫べない。周りの魂や三人が被害にあうかもしれない。しかも、その悪魔は田中さんでは無く、ジョーカーを狙っているようだ。殺す気なのか。

田中さんを見ると、かなり薄くなっている。

「もうすぐ、昇天だぜ」

「ありがとう。ありがとう、皆。ありがとう、紫苑ちゃん。ありがとう」

「ううん」「またなぁ」「絶対来いよ」「また会えたらよろしくなー」

紫苑の墓場の魂達は十分屈強らしい。全員わいわいと騒ぎ出した。怖さなんて忘れている。

「田中さん、また来てね！」

紫苑は一瞬だけ悪魔の事を忘れた。にこりと微笑むと、全員がおうおうと微笑んだ。

そして、田中さんは消えた。綺麗な笑みと淡い光を一瞬残して。

「葬儀、完了」

冷静な声で、言ってナイフを抜こうとした瞬間。

遠くで声がした。

「蒼也(あおや)！！」

誰の声で、誰の事を呼んでいるのだろう。

だが、そんな事は考えていられなかった。

その声と同時にジョーカー目掛けて、隠れていた悪魔が襲い掛かったのだ。避けきれない。あのままでは、首に当たってしまう！

父親と同じ方法で殺される息子。葬儀屋が死んだ後は回りの魂が食い荒らされたという真実。それに、彼を死なせたら天国の田中さんが幸せになれない。つまり、皆幸せになれない！　身代わりになってでも、と日頃の紫苑では思いもよらない考えが頭をたたきつけた。

紫苑は飛び出していた。

「ばっ馬鹿！」

ジョーカーと、蒼さんの声が聞こえたような気がした。その後に右腕に痛みと、みんなの名前を呼ぶ声が聞こえた。

車を思い切り右腕にぶつけられたような、重い重い痛み。それが新鮮な血と代わる。

目の前でもう一撃、と迫ってきた悪魔。しかし、ジョーカーがすかさず胸元にナイフを付き立てて地獄送りにした。よかった。これ以上の怪我は痛くて痛くて死んでしまう。

だが。

「！！！」

じんじんじん、と予想以上の痛みに襲われた。

「あああああッ……っ、はやく、ナイフ、ぬかないと……ジョー、カー」

「っああ！」
痛みを堪えられず、地面に倒れこむ。反転した世界で、ジョーカーが墓に突き刺さっているナイフに手を掛けていた。
「今宵の晩餐は終了した」
そして引き抜く。
また柔らかい光が皆を包み込んだ。――と、じっくり見てられない。どくどくと右腕の、関節より下辺りから血が溢れ出ている。少しばかり肉を食われたようだ。涙で視界がにじむ。
大慌てでジョーカーが駆け寄ってきて、助け起された。

「大丈夫か！？　済まん、俺が未熟だったから……っ」
「……ッ」
『大丈夫？　紫苑……』
百合奈が目の前をふらふら飛んだ。
『その、ごめんなさい』七瀬が何故か謝る。
『もしかして、私達が食われていたかもしれないもんね』しゅん、と夏海が言った。
『ごめんね』芽衣子も謝った。
すると、優しげ声が飛んできた。

『済まない、紫苑』
「蒼さん」
辛うじて、それだけ言葉に。その瞬間、ジョーカーの顔が強張るのが分かった。唇が、ふるふると震えている。
ひゅるり、と蒼さんは飛んできた。
そして、言う。
『お前』
聞いたことも無い、厳しい声だった。
『紫苑はこの墓所の墓守だ。俺たちにとっての家族でもある。俺にとっては、地獄から救い上げてくれた恩人だ。……比喩だぜ？　で

もな、謝っただけで済む様なもんじゃない』
「……あ、あ、あ」ジョーカーは目を丸くする。日本語さえ発せていない。
『それに、食われた。肉を食われて、しかもあの悪魔はもう一度襲ってこようとしただろ。言ってしまうが、また近いうち狙われるだろうな。それだけ肉が旨かったっていう事だから』
「え」と、紫苑。
『そして、葬儀屋の敵であるあいつら……悪魔を飼おうとするあいつらに捕まるだろうな。悪魔の上等な餌として。色を識別出来るほどの墓守だ、重労働させてもいい』
「……っ」
『それに、女の子。何されるか分かったもんじゃない。その上、戦闘経験は無いし右腕は負傷中――。どうするつもりだ?』
蒼さんは、誰もが氷と化してしまう様な冷たさで言い放つ。
ジョーカーも硬直していた。
それから、追い討ちをかける。……と、思われたのだけども。

『俺のせいだよな……本当、済まない』
「え?　え、え」
蒼さんは何故か上下に揺れて、謝罪した。
どういう事?
それから、蒼さんはふらりとジョーカーに近付いていった。
『四年ぶり、か。十二歳だったから、かなりでっかくなったな。こんな役立たずでごめんな』
「まさ……か。嘘だろ、だって、だって、あんた、俺の……?」
「?」
『……遠崎蒼也(とおざきあおや)。お前の名前、だろ』
「ああ」
『俺の名前は』
一拍。少し躊躇するように。

しかし、蒼さんは止める事だけはしなかった。
『俺の名前は……遠崎蒼人（とおざきそうと）。正真正銘、お前の馬鹿な“父親”だよ』
「えええっ！」
だが、多くの魂達はやっぱりなぁと頷く。分かってたんだ？
『魂が何だか似てる気がしたんだー』『っていうか、蒼さんの眼差しっていうか』
『雰囲気似てたよね』『性格は似て無さそうだけどね！』『両方もてそうだけどね！』
『危ない男と無垢な少年――映画化よ！　まさしく映画よ！』『俺らみれねぇじゃん』
『でも、ここにテレビ買えば、見れるよ！　ＤＶＤで！』『紫苑買ってきてーブルーレイねー』
『駄目駄目、紫苑は子供だよ。爺様に頼みましょう』『治助はケチだし、誰か色気使え、色気』
『魂に色気が関係あるかいな』『――で、何の話だっけ？』『映画見ようって話』
『そうだったけな』『うん、そうそう』
わいわい、わいわい。
ちょっと待って欲しい。突込みが追いつかない。
身内がいるのに、何でこんな共同墓地なのー？　とか、聞きたい事はたくさんある。だけど、それより右腕が悲鳴を上げていた。
と、ジョーカー……蒼也は――くっと紫苑を持ち上げた。
しかも、お姫様抱っこで。
「えええええええっ」
「がちで姫君だな。雰囲気壊れたし、まず家に運ぶ」
『行って来な』
「後で……話せるか？　えと、……親父？」
『いいぜ。後で、な。まずはその姫さんを連れて行ってやりな』
まるで笑うように蒼さんは言った。
待って、待って、待って！　家には家族がいるんだよ！

しかし、それは了承済みのようで。

ぴーんぽーん。

両手が使えない蒼也の代わりに、紫苑は左腕でチャイムを押す。

秒殺で扉が開いた。

「紫苑ーっ！　何その男の子はっ、何してたの二人で！　何で抱っこされてんの！　きゃーっ、何その怪我！　何か危ないプレイ？　いやぁぁぁ！」

母さんが出てきた。

紫苑が説明しようとしたが、右腕ががんがんと痛みを告げて上手く話せ無い。すると、蒼也がするりと紫苑を降ろしながら言った。

「済みません、俺が悪いんです。ちょっと探険気分で墓場に行ったんですよ、俺。幽霊には効かないだろうけど、不審者防止にナイフを持ってて……」

「あっ、私が塀からまた行って。その時にぶつかったの！　その衝撃で、怪我したんだ！　ごめんなさい！　もう止めておきなさい、ってあんなに言われたのにっ」

「……大体、分かったわ。抉れてるじゃない……病院に行きましょう」

母さんは幾分落ち着いたようだ。

こくり、と紫苑が頷く前に、奥から治助さんの声がした。

「いい。病院はいい。紫苑、こっちにおいで。部屋にくるんじゃ」

「……あー、蒼也は？」

「来い」

視線を合わせ、半ば母さんを無視して二人で入る。母さんは、何か訳があるのだろうと思って台所に戻った。こういう時だけ聡明な母で、本当によかった。

廊下を歩いて行くと、扉に出会う。開ける前に、向こうから開けてくれた。

「失礼します」
「入るね」
「おうおう」
和室。ちゃぶ台とテレビ、後は棚しか無い。
「で、婚約の話だが――」
「なんでだよ！！」
ぶっ飛びすぎた話に、つい二人で突っ込み。意外と、息が合うじゃないか。
いや、治助さんの話が飛びすぎていただけかもしれない。
「おうおう、元気そうで。じゃあ、もう大丈夫かな」
「え？　何で、怪我してるのよ。紫苑」
「その怪我は病院じゃ治せない。優秀な医療師に見せよう」
「？？」
「今は遅いわ。明日の朝すぐ向かうぞ」
治助さんはにっこり笑ってから、バタンと倒れた。一瞬ひやり、としたがただ寝たらしい。やる事全て面倒くさい人だ。
寝てたわりに治助さんは続けた。
「ジョーカー、君はここで寝ていけ。紫苑は母さんに包帯とかを巻いて貰ってから寝たらどうじゃ？」
「は、はい」
誰？　という目線でジョーカーが見てきているのに、今更気付いた。
「お祖父さんよ」
「あ、どうも」
「……医療師の方がこっちへ来てくれれば楽じゃのに。大変じゃ」
他人事のように言った治助さんに、初めて殺意が沸いた。
この、年寄りが。
「じゃ、おやすみなー」
「はいはいっ！」

「えと、えと、えと。じゃあお邪魔させていただきます……」
ジョーカーは必要以上に慌てていたのを覚えている。
その後、紫苑はすぐに包帯をつけてもらって、寝た。
疲れが溜まっていたのだ。
――そして次の日の朝、五時。
続く

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1907p/

葬儀屋ジョーカー

2011年10月9日22時59分発行